

初代学長 天野利武先生についての調べ

―学院葬での「弔辞」にみられる天野利武先生―

一貫連携教育機構学院志研究室 藤原栄一

はじめに

本年、二〇一六年は、追手門学院大学開学五〇年を迎える。大学の歴史を紐解いてみると、開学の準備からかわられた天野利武先生の存在なしに、その後の発展と歴史を語ることはできないように感じられる。本稿は、保管されていた学院葬での「弔辞」から先生のご功績を再認識し、創設者を偲ぶ機会になればと考えた。

天野先生の略歴については、勝尾寺霊園の墓地にある「墓碑」に、下のように記されている

天野利武先生は、昭和三九年秋、ちょうど六〇歳で十一年余り務められた大阪大学文学部を（十月十五日）退官され、学校法人追手門学院の院長に（翌、十六日）就任された。先生の回顧録によると
：
「この学院の前身は、大阪偕行社附属小学校という大阪の超名門校
：」と、最初の印象を記されている。

- 一九〇四 東京にて文武の二男に生る
- 一九二四 第一高等学校卒業
- 一九二七 東京帝国大学文学部心理学科卒業
- 一九二七 旧京城帝国大学法文学部助手
- 一九三一 同 講師
- 一九三六 同 助教授
- 一九三九 同 教授
- 一九四三 文学博士（東大）
- 一九四五 終戦帰国
- 一九四六 立命館大学教授
- 一九四八 京都府教育長（初代兼務）
- 一九五三 大阪大学教授
- 一九五五 大阪大学附属図書館長
- 一九六二 大阪大学文学部長
- 一九六四 追手門学院院长
- 一九六六 追手門学院大学学長（初代兼務）
- 一九七四 薫二等瑞宝章
- 一九七八 退職



就任後間もなく、学院の「創立八〇周年記念事業」として掲げられた、「総合学園構想」を実現し、さらなる発展のために取り組まれた、大学の校地と高校の移転先を茨木市郊外に求め、準備が本格化した。一九六六（昭和四一）年四月大学開学、四二年四月高校移転、四四年幼稚園の開園（豊中市）と続き…結果として、四年という短い期間で「総合学園」の完成を遂げられたことになる。

一九七八（昭和五三）年三月末、十四年間務められた学院長と、十二年間務められた学長とを同時に退職された。そして、一九八〇（昭和五五）年十二月十五日ご逝去、十七日に自宅密葬の儀を経て、二二日には「学院葬」が執り行われた（享年 七十六歳十一ヶ月）。



学院葬 五人が読まれた最後の「別れの手紙」

弔辞

天野君、君との交友は六十年になる。お互に旧制第一高等学校の校門をくぐったのは大正十年のことだった。君は名門、東京府立第四中学校の出身で、我々地方出身の者から見ればまことに洗練された存在であった。

然し君は微笑を湛えて悠容迫らず誰とでも穏やかに接し、いわゆる秀才タイプを感じさせない好ましい人物だった。速水滉教授から心理学の講義を受けたとき、高校生として学問の世界と云うものを覗かせて貰ったような感動を覚えたものだったが、君は恐らくこれが機縁となって心理学専攻の道に進んだのではないかと思う。後速水先生が京城大学の学長となられ、君がその許で同大学の教授となられたのも深い因縁であろう。

君が大阪大学に勤められるようになってからは、時々お目にかかる機会を持つことができるようになった。君は人懐こい性格で、特に高校同窓の各種の会には東京の場合でも支障のない限り顔を見せたものだった。ゴルフもお互お世辞にも上手とは云えないが、チャンス造っては心から楽しんだものだった。

我々の驚きは、君が追手門学院に変わられてからのことである。追手門学院を極めて短期間に目をみはるような立派な学園に仕上げられたあの経営手腕が何処に潜んで居たか、誠に友人として不明だ

ったことを告白しなければならぬ。

数年前のことであるが、国会の法案審議の関係で学校管理の問題について、文教委員会が大阪で現地公聴会を開いたことがあって、君にも公述人の一人として出席して貰ったことがあった。この時、国会の委員側からの質問に対し、君の供述はあたかも生徒に諭すが如き情景で、後で「貫禄だネー」とさ、やかれたのであった。

近頃君は難しい病気に罹られたと云うことで皆案じて居たが、君からの便りは明るい調子だったので、まさかと思っていたが遂に不幸な結果となってしまった。

友情に篤い、良識に富んだ人間性豊かな良友を失ったことを、皆心から悲しんで居る。天野君、どうぞ友人達の心からの哀悼の意を受けて安らかに眠って下さい。

さようなら

昭和五十五年十二月二十一日

友人代表 金井 元彦

追悼のことば

追悼のことば

本日ここに大阪大学名誉教授 天野利武先生の追手門学院葬が執り行なわれるにあたり、謹んで追悼のことばを捧げたく存じます。

先生は昭和二年東京帝国大学文学部を御卒業、京城帝国大学法文学部に当時有数の心理学実験室を創設、発展させてこられました。終戦後は立命館大学教授に就任され、次いで京都府教育委員会 教育長として、戦後混乱期の教育行政の建て直しに尽力されました。

昭和二十八年大阪大学文学部に新設された教育心理学講座の教授に就任され、その後心理学第一講座の教授として昭和三十九年十月の御退官まで多くの後進を育てられました。十年あまりの大阪大学御在職中、心理学実験室の拡大充実、発達加速現象の研究、道德意識・非行・青少年問題の研究に加えて、ニホンザルの比較行動学的研究にも手を染められました。これらはいずれも今日の心理学における重要な研究テーマとなっており、聞いております。またその間、附属図書館長、評議員、文学部長を歴任されまして、大学運営にも大きく寄与されたのであります。

追手門学院 院長に就任されてからは、同学院大学の創設に多大の努力を払われたほか、先生の理想とされた幼稚園から大学までの一貫教育の総合学園を完成されました。先生のこのような教育・研究・運営に関する卓抜な識見・能力には何人も深く敬意を捧げると

ころであります。

先生はまた日本心理学会・日本応用心理学会の理事、関西心理学会の会長をつとめられ、心理学会の発展に多大の貢献をなさいました。

また、大阪府精神衛生協議会・大阪府児童福祉審議会・近畿高校教育研究協議会の各会長をはじめとして、教育・福祉にかかわる幅広い領域に大きな役割を果たされました。これらの分野においても先生の豊かな学識、高い見識は接する人すべてに大きな影響を与え、高潔なご人格は多くの人の深く敬慕するところであったのであります。

この偉大な学者、すぐれた教育者としての先生を失ったことに私どもは深い悲しみを覚えます。ここに心から先生のご冥福を祈り追悼のことばとさせていただきます。

昭和五十五年十二月二十一日

大阪大学総長 山村 雄一

弔 辞

ここに故天野利武先生の学院葬を執り行うにあたり、先生のご霊前に謹んで弔辞を捧げます。

かねて大阪大学附属病院に入院 御治療中の先生が、御家族、医師団の懸命の看病・御治療の効もなく、十二月十五日午前十一時十分、他界された由、訃報を受けました。つね々憂慮は致しておりましたものの、最悪の報せは、私たちにとっても痛恨極まりなく、誠に哀悼の念を禁じ得ません。

先生が本学院に学院長としておいで下さったのは、昭和三十九年十月、大阪大学文学部部長の現職の在任中でありました。それだけに、先生の本学院に傾けられた情熱と責任感の程が窺われます。以来、先生には、昭和四十一年、茨木市安威の地に大学を創設され、御退職の時までの十二年間にわたり同学長として揺籃期の大学教育の発展に尽され、また学院長としては、幼稚園の設立から、小・中・高・大学に到る九十有余年の伝統ある総合学園の教育はもとより、その経営についても、法人理事としての責任を十二分にお果たし頂きました。

心理学者・教育者としての御功績もまさに本学院にふさわしく、尊敬申し上げております。また、学校行政の面でのご尽力は、唯に本学院の経営発展のみにとどまらず、初代の教育委員会教育長として、終戦直後の混乱の中で、日本の学制改革の方向づけをされた時から、抜群の手腕をふるって来られた事は、我々の周知するところ

であります。また、日本ユネスコ国内委員会委員をはじめとして、多くの公共福祉審議機関の指導者として重きをなして来られました。その性、極めて高邁にして温順、学識、識見の衆に秀でたるは、万人の認めるところでありましたが、常に微笑を絶やさず、而も、決断、実行力に富み、周到なる配慮のもとに何事も進めて来られた治績の実は、各界の敬服するところでありました。

さりながら、昭和五十三年後退職後は、悠々自適のお暮らしの中にも病魔がしのび寄り、私もひそかにお案じ申してはおりませんが、薬石効なく、こんなにも早くお別れしなければならぬ事は、筆舌に尽せない悲しみであります。

こうして先生の遺影の前に立つておりますと、申しあげたい事、語らいたい事は尽きませんが、それも今は許されなくなりました。

この上は、先生、安らげくお眠りください。そして、精霊この世に居ませば、本学院の将来を生前とかわりなくお見守り下さい。あとに残る私共、お別れの涙をこらえつ、先生の永遠の御冥福を衷心よりお祈り申し上げ、私の弔辞と致します。

昭和五十五年十二月二十一日

葬儀委員長 行田 一典

告別の辞

本日ここに故追手門学院学院長兼大学長、大阪大学名誉教授、追手門学院大学名誉教授天野利武文学博士の学院葬が執り行われるにあたり、謹んで先生のご霊前にお別れの言葉を申しあげます。

先生は明治三十九年東京に生まれ、府立第四中学校、第一高等学校を経て、東京帝国大学文学部心理学科に入学され、昭和二年卒業と同時に京城帝国大学総長速水滉先生に招かれて京城帝国大学助手となられ、昭和十四年三十五歳の若さで教授となり、さらに昭和十八年三十九才で東大から文学博士の学位を授与され、終戦までの十八年あまり京城におられ学究生活に没頭されました。そして終戦の年九月に内地に引揚げられ、昭和二十一年末川博総長の懇請で立命館大学文学部哲学科の主任教授に就任されました。一方、京都府木村博知事の招きにより、しばらくは立命館大学教授のまま京都府教育長の重責を担われました。

次に昭和二十八年には大阪大学初代法文学部長桑田芳蔵先生の懇望により大阪大学の教授となり、最初は教育心理学の講座をやがては心理学第一講座の担当教授となり、多くの優秀な心理学者を世に輩出されました。これはまことに大きな先生の功績であったといわねばなりません。大阪大学時代の先生は、図書館長、文学部長を歴任され、大阪大学最初の海外総合学術調査隊として東パキスタン原住民の総合調査にあたられました。

そして昭和三十九年大阪大学在職中に永い傳統と高い名声をもつ学校法人追手門学院の学院長に迎えられました。丁度先生の六十才の秋でございました。

先生は学院が創立八十周年を迎えたとき、その記念事業として学院を総合学園にすることを計画され茨木市郊外に土地を求めて大学の創立を図られ、ごく短い半年余りの準備期間中に完了をみましたことは、それは関係者一同の不眠不休の努力の賜物であります。とりわけ教員組織の整備は先生の声望と力量とが相俟ってはじめて可能であったと思われまます。さらに昭和四十二年四月には高校を大学の隣接地に移転し、昭和四十四年に幼稚園を千里ニュータウンの中に設置して総合学園の形態をととのえられました。

先生はもと文学を志望され乍ら故速水滉先生の心理学にひかれて、この方面を志ざされたのでありますが、学術論文その他の著述も名文の格調高い美文でありました。

先生は、関西心理学会会長・近畿高等学校教育研究協議会の会長をはじめロータリー会員として活躍されました。先生のお人柄は学識と経験とを兼ね備えられ円熟した境地に達しておられました。

昭和五十三年、十四年間の追手門学院長と十二年間つとめられた学長を退職されましたが、その後も法人の理事としてご尽力をいただいておりましたのに、不幸にして病魔に冒され医師団はじめ学院の教職員はじめ学生諸君の懸命の献血もむなしく、薬石の効もなくついに永眠されましたのはまことに痛恨の極みに存じます。

しかし先生の御霊はこの地に留って学院の今後の発展を見守ってくださいること、信じております。

私たち学院の教職員一同は心を一つにして学院発展のために力を注ぐ所存でございます。まだまだ意を尽しません、これをもってお別れのことばとさせていただきます。

昭和五十五年十二月二十一日

追手門学院大学長兼学院長事務取扱

葬儀副委員長 中村 秀

弔 辞

昭和五十五年十二月十五日 私達追手門の学生にとって永遠に
忘れることのできない日となりました。

未だに間違いではないかという気持ちの奥底に残っておりま
すが、今日このようにして学院葬が行われるに至りましたことは悲
しみに絶えません。

天野先生の学問に対する情熱ある講義やゼミを受けてこられた諸
先輩方から天野先生は御自分に対して、また私達学生に対しても大
変厳格な先生であったと聞かされております。天野先生にお
世話になり、社会へ巣立っていかれました多くの先輩方に代わりま
して弔辞を述べさせていただきます。

天野先生が昭和三十九年十月 追手門学院長として御就任され
てから昭和四十一年四月 大阪偕行社附属小学校以来 創立八十周年
記念事業としての大学開設をはじめとして、学院のために多大の御
貢献を聞きおよんでおります。皆様御存じの様に追手門学院は幼稚
園から大学院までの各段階の学校を含む総合学園に発展してしまし
たが、内容の充実した総合学園となるためにはなお多くの問題が残
されています。

しかし本学院が特色ある伝統と学風とを持つ優れた総合学園に発
展してゆくことが天野元学院長学長の大きな願いであったことと思
います。後に残された私達は天野元学院長の信念を受け継ぎこれま
での大いなる功績をむだにすることなく、今後栄光に包まれた創立

百周年に結びつける為にも、今年御就任されました中村学長はじめ
教職員の方々のご活躍と、卒業生在校生のなお一層の努力を惜しむ
ことなく輝かしき百周年に向かって、追手門学院は歩んでいかなけ
ればなりません。

最後に、天野先生がお亡くなりになられたことは打ち消すこと
のできない事実なのです。しかし、先生の御人格、先生の教えは追手
門の学生の中に消え去ることなく生き続けることでしょう。追手門
学院の前途は多難でございますが、私達学生は天野先生の教えを無
駄にすることなく本学に学ぶことに自信と誇りをもって前進しなけ
ればなりません。

ここに哀惜の念をもって謹んで天野先生のご冥福をお祈り申しあ
げて弔辞にかえさせていただきます。

昭和五十五年十二月二十一日

追手門学院大学 経済学部 三回生

学生代表 川戸 義正

おわりに

弔辞の内容から、学者・研究者・教育者、そして戦後間もない教育行政（京都府）の責任者として、また夢をもたれて大学開設にあたられた天野利武先生の多様な面をうかがい知ることや、思い浮かべることができるかと思えます。「弔辞」とは言え、今となれば、「天野利武先生」を知る貴重な資料であることから、学院葬で読まれたままの形で掲載させていただくこととしました。

大学開学五〇年の今年には、天野利武先生生誕一一二年、没三六年にあたります。何れにしましても、天野先生は、高度経済成長期にあった追手門学院、そして、大学創成期においてはきわめて「奇特」な存在とされ、学院の歴史を築かれたキーパーソンのお一人であることは周知のことです。

附記：本稿の内容（戦前の京城府、終戦・引き揚げ、京都府の教育行政に携わられた時代）に関連して、「二男の天野城二さんから、その当時のお話を聞く機会がありました、御礼申しあげます。

天野先生、本学院 赴任当初についての参考資料

『遅明録―天野利武先生 その人と業績』（一九八二）天野利武先生追悼出版会

「天野新学院長を迎えて」名誉学院長 八束周吉『追手門』四六号（一九六四）追手門学院小学校

「追手門学院の将来と当面の課題」学院長 天野利武『追手門』四九号（一九六九）追手門学院小学校

《附》大学が開学した一九六六年度「学院報」に、天野学院長による「教育方針」が示されている。天野利武先生の本学院における教育の原点を知る意味で転載しておきたい。

追手門学院の教育方針

昭和四一（一九六六）年度「学院報」―追手門学院―

追手門学院の教育は、日本の社会の各方面で重要な役割を演じつつ、日本の社会と文化の発展に大いに貢献しようとするような人物を育成することを目指している。表現の仕方はちがっているが、将来、国家社会に貢献すべき指導的人材の育成ということは、建学以来踏襲されてきた本学院の教育方針の根幹である。

それならば、どのような人物が日本の社会と文化の発展に貢献することができるであろうか。このことは、日本の社会と文化の発展の現段階についての確な認識に基づいて判断されなければならない。

現在の日本の社会と文化の著しい特色をなしているのは、
（1）自然科学と産業技術の飛躍的な発達と、これにともなう諸現象である。

これらは、その反面において

（2）人間の機械化、人間性の喪失という危機を招来しつつある。

この人間性の喪失は、人間の原始化、動物化の傾向となって最近の青少年犯罪を特色づけている。

科学技術の躍進と人間の機械化ないし原始化傾向は、しかしながら日本固有の現象ではなくして、世界の先進諸国家と共通のものである。

これに対して、戦後民主化の方向をたどりつつ、ある日本の日本の社会の各方面で見られる固有の現象ともいべきものは、

（3）民主主義の未成熟に基づく各種の混乱である。

それらは、政治の場でも、教育の場でも、工場でも、電車の中でも、家庭の中でも、いたるところに見られる現象で、それらの混乱を通じて、日本の民主的社会的後進性が遺憾なく露呈されつつある。

もう一つ挙げておかなければならないのは

(4) 建国以来日本がはじめて経験した全面敗戦が国民一般に及ぼした心理的影響の痕跡であって、戦後若年層にしばしばみられるところの国家意識の稀薄化民族的自信の後退というようなものは、いずれもそのあらわれであるともみることができる。

この敗戦の残した心理的痕跡は、国民の間に、国家社会の発展のために大いに力をつくすというよりも、むしろ自己の利害を中心に行動する態度を生ずるようになり、一部の人々の間には、自国を蔑視し、他国に迎合せんとする傾向さえ生ずるに至った。

以上のような、特色を持つ日本の社会における指導的人材としてどのような人物が要求されるか、それはおのずから明らかである。すなわち、先

第一に、科学技術に関する高度の一般的知識を持ち、必要な場合に、必要な知識を用意できる研究法や研究技術を身につけようと常に努力する人間でなければならない。

第二に、美的価値・倫理的価値に対する健康な感受性を持ち、本能的欲求にのみ引きずり廻わされることのない、その意味で自由なそして強い意志と責任感を持つ人間、つまり高度に開発された人間性を持つ人でなければならない。

第三に、確固たる個性を持ち、自他の人格・生命を尊重し、常に相手や第三者の立場にも立つて物考えることのできる人間、規則や法律を守り、社会の秩序・平和を乱す有形・無形の暴力を断呼排撃する勇気を持つ人間、自己の信念や主張を民主的な手続きにより社会全体の利益と調和させるような形で貫こうとするような人間でなければならない。つまり強い個性を持った民主的な人間でなければならない。

第四に、日本の歴史を正しく理解し、日本固有の文化のすぐれた特性と、科学的に解明された日本人の能力や国民性を明確に認識し、その短所は、これを率直にみとめて率先してその矯正に努力すると共に、その長所は、これを大いに伸張し、みずからの人格と教養を高めることによって漠然たる自国劣等感を克服しうる人間、一口に言えば、日本の国家民族の進歩発

展に積極的に貢献せんとする謙虚にして誇り高き日本人でなければならない。

そこで追手門学院の教育方針として、現在においては、次の諸点に重点を置くことにしたい。

- 一、高い学力と旺盛な研究心と強健な身体とを持つよう指導する。
- 二、意志を鍛錬し、情操を陶冶し、人間性を高める。
- 三、民主的な生活態度を身につけさせる。

特に秩序やルールを乱す有形無形の暴力を排する勇気を養う。

- 四、自分の属する団体や、国家社会の発展に積極的貢献することに生きがいを感じるような、謙虚でしかもしっかりした民族的自信を堅持する指導的日本人を作る。